

令和 5 年 5 月 12 日現在

機関番号：32663

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K03198

研究課題名（和文）ポジティブな社会的状況に関する検討 - 状況と特性の相互作用論的視点から

研究課題名（英文）Exploratory research on positive social situations

研究代表者

堀毛 一也（Kazuya, Horike）

東洋大学・人間科学総合研究所・客員研究員

研究者番号：10141037

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）： ポジティブ心理学研究の中で状況認知とウェル・ビーイングとの関連を検討する研究を行った。関連する理論的背景について論文としてまとめたうえで、まず、場面、関係性、行為という3側面からの分類枠を作成した。次に、欧米で発表された4つの状況認知尺度を用い、因子的妥当性からCAPTIONと呼ばれる尺度が安定した構造をもつことを明らかにした。この尺度とともに強み尺度を整備し、ウェル・ビーイングに関する予測的妥当性を検討した結果、一般的ウェル・ビーイングの予測には強みが、状況的ウェル・ビーイングの予測には状況認知が有効であることを示した。最後に、強みと状況認知のマッチングの重要性を示す研究を実施した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

心理学的研究における状況要因の重要性については、これまでパーソナリティ分野における「人間-状況論争」を中心に検討が続けられてきた。欧米では、最近また心理的状況認知を中心に活発な議論が続けられているが、本邦ではその内容はほとんど紹介されていない。さらに近年注目を集めているポジティブ心理学研究でも、状況要因に注目した研究はきわめて少ない。本研究の成果は、心理的状況研究としても、またポジティブ心理学的な状況研究としても、これまでにない試みとして意義のある研究と考えられる。とりわけ、ウェル・ビーイングの予測に状況要因が重要な意味をもつことを明らかにした点は、今後の研究に大きな影響を与える可能性がある。

研究成果の概要（英文）： Positive psychology has shed light on the human strengths based on personality trait theory. Some researchers highlighted the importance of situational factors on the study of strengths. However, there were few studies focused on situational factors in this area. In this study, we examine the predictability of situation cognitions and human strengths toward some local and global subjective well-beings. Initially, we checked up the validity of some situation cognition scales. Then, we compared the predictability toward SWBs between the strengths and situation cognitions. We showed the predictability of situation cognition (CAPTION) toward local SWBs were higher than strength factors by using hypothetical multiple regression. On the other hand, situation cognition had only small predictability toward global SWB. Another study showed the importance of matching between strengths and situations toward SWBs. These results suggested the importance of situational study on positive psychology.

研究分野：社会心理学

キーワード： ポジティブ心理学 心理学的状況 状況認知尺度 特性的強み ウェル・ビーイング 状況分類 階層的重回帰分析 予測的妥当性

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

ポジティブ心理学の研究は、主として個人の主観的ウェル・ビーイングやポジティブな特性研究(強み研究)を中心に進められてきた。こうした研究は、主としてパーソナリティの特性論的立場を背景に展開されてきたが、特性としての側面から強みにアプローチするだけでなく、状況に依存した判断、行動、反応面を扱うこともできることが指摘されてきた(例: Kashdan & Steger, 2011)。たとえば、Biswas-Diener, et al. (2011)は、「どの強みや、どのような能力がどの程度が使用されるかに関しては、状況が重要な情報を提供してくれる」と指摘している。けれども、実際には、こうした側面を取り入れたポジティブ心理学研究はほとんど行われてこなかった。そこで、本研究では「状況」変数に着目し、ウェル・ビーイングとの関連を検討する研究を実施した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ポジティブ心理学や、人間・状況論争の成果を背景に、「ポジティブ」と解釈される状況の分類枠を構築し、状況と個人の特性(強み)との関連を明らかにしたうえで、人と状況のマッチングがウェル・ビーイングの増進をもたらす可能性を明らかにすることである。具体的には、1)人が「ポジティブ」と解釈する社会的状況はどのようなものか、ウェル・ビーイングのいくつかの側面に添って、整理・検討したうえで、2)そのような状況が、認知的にどう解釈されているか、最近の状況研究の知見を参考に検討し、3)個人の強み(特性)とそうした状況解釈・状況選択の関連の様相を検討した。最終的には、4)強みと状況との「マッチング」がウェル・ビーイングの増進につながるか調査実験的に検討を試みることを目指した。

3. 研究の方法

上記の目的を達成するために、後述するように理論的背景をまとめたうえで、都合3回のweb調査を行った(いずれもマクロミル社に委託)。

まず第1回調査(2020年3月)では、目的1)・2)の達成を目標に20代から60代の男女1442名(男性641名、女性801名)に対し、自由記述方式で、ここ1ヶ月程度の間、a)「記憶に残っている状況・場面」b)「頻繁に遭遇した状況・場面」について(対象者はいずれも700名) どのような状況・場面で、どのような人々と、どのような行動をしたか、回答を求めた。引き続き、状況のポジティブ性(ネガティブ性)(7段階)状況とウェル・ビーイングの諸側面(感情的・意味的・活動的・関係的、日本的)との関連(10項目7段階)について回答を求め、さらに以下の4種類の状況評定尺度に回答を求めた(いずれも7段階評定)。a)DIAMONDS(Rauthmann, et al., 2014; 32項目)、b)SAAP(Brown, et al., 2015; 28項目)c)CAPTION(Parrigon, et al., 2017; 35項目)、d)Situation5(Ziegler, et al., 2019; 15項目)。加えてTIPI-J(小塩他, 2012; 10項目)と個人的なウェル・ビーイングの程度(11段階評定)についても回答を求めた。この調査はCOVID-19の流行直前に行われており、その影響は少ないと判断された。

第2回調査(2021年3月)では、目的3)の達成を目標に、20代から60代の男女1125名に、調査1と同様に自由記述方式で、ここ1月の間に経験した「ポジティブな状況」について回答を求めた。状況評定尺度はDIAMONDSとCAPTIONの2つに絞り、状況的ウェル・ビーイング、個人的ウェル・ビーイングに加え、SWLS(Diener, et al., 1995; 角野訳, 1994; 5項目6段階)心理的ウェル・ビーイング(Ryff, 1989, 岩野他, 2015; 18項目6段階)強み尺度(森本・高橋, 2013; 島井, 2019を元に作成、48項目6段階)Big Five尺度(並川他, 2012より作成、15項目6段階)を用いて回答を求めた。COVID-19の流行のさなかの調査であったため該当する状況なしとする回答が203名あり残る922名を分析対象とした。

第3回調査(2022年2月)では、目的4)の達成を目標に、20代から60代の男女1030名(男性518名、女性512名)を対象に、状況的ウェル・ビーイングに関する5状況について、経験頻度、ウェル・ビーイングの上昇・低下および持続の程度を尋ねた上で、CAPTION、強み、強みの使用(高橋・森本, 2015)心理的ウェル・ビーイング、個人的ウェル・ビーイングの各尺度に回答を求めた。

4. 研究成果

1) 研究の理論的背景

研究の初年度には、文献研究により理論的背景の整備を目指した。まず、今回の助成とこれまで複数回の助成の成果として、ポジティブ心理学に関する単著を公刊した(図書1)。また、状況研究についても「人間・状況論争は続いている」と題する論考を執筆した。ここでは、相互作用論に関する考え方や、特性論と社会的認知論の融合について解説したうえで、欧米で顕著な進展がみられる心理的状況研究の成果について紹介し、これまで状況研究の問題点のひとつになっていた状況の測度について、DIAMONDS、CAPTION、Situation5と呼ばれる一般的な尺度が開発されていること、また進化的理論にもとづく状況評定尺度(SAAP)や相互依存理論に基づく評定尺度(SIS)なども開発されていることを示した(図書2)。さらに、関連する業績として、「ポジティブ心理学と社会的認知」に関する論考もまとめた(図書3)。

2) ポジティブな社会的状況・人間関係・行為の分類について

第1回調査では、該当する状況無しとする回答者145名を除外し、有効回答:1297名(男性565名、女性732名)について分析を行った。状況のポジティブ性評定については、記憶に残る状況($x=4.55, SD=2.17$)と、頻繁に体験した状況($x=4.63, SD=1.80$)との間で差は見られなかった($t=0.78, ns$)。記憶状況(a)、頻繁状況(b)のどちらでも、回答の約6割が評定値5以上(ポジティブ)と評定されており、人は日常生活の中で、ポジティブな体験を想起し、記憶している傾向があることが示された。また評定平均には性差がみられ、女性のほうが体験した状況をポジティブに捉えている可能性が示唆された(男性 $=4.45(SD=1.95)$; 女性 $=4.69(SD=2.02)$; $t(1295)=2.165(p<.031)$)。

今回のデータを利用して、あらためて状況分類枠(堀毛, 2000)を検討した結果、枠組はほぼ妥当で、コーダー間の一致率も高い(94.2%)ことが示された。今後の状況研究の分類枠として利用できる(表4-1)と判断された(以上、学会報告(1,3,4))。

引き続き、同様の手法により、「人間関係」に関する分類を試みた。ここでは、人々との関係性について、やはり堀毛(2002)の関係分類を基盤とする23のカテゴリに、ペット、SNS、初対面という3カテゴリを加えた26カテゴリによって、2人のコーダーが分類を試みた(一致率95.9%)。ここでは、評定値1~3をネガティブ状況、評定値5~7をポジ

表4-1:「状況・場面」に関する分類枠の検討結果

状況	労働 仕事 会議 交渉	教育 学業 授業	コミュニ ティ 地域社会 福祉	消費 買い物	人間関係 親睦	家事 自宅 日常	休日 休職 旅行 観光地	趣味活動 運動	外食 宴会 パーティー	宗教的儀式 催し 儀式	健康 病気の 入院 介護	移動 交通 途中	その他		
状況	記憶に残る 度数	37	16	2	73	16	118	170	54	67	17	29	41	5	645
	CELLNAMEの 標準化残差	5.7%	2.5%	3%	11.3%	2.5%	18.3%	26.4%	8.4%	10.4%	2.6%	4.5%	6.4%	8%	100.0%
	残差に連通 度数	127	17	20	94	14	201	27	69	35	0	9	29	10	652
	CELLNAMEの 標準化残差	19.5%	2.6%	3.1%	14.4%	2.1%	30.8%	4.1%	10.6%	5.4%	0.0%	1.4%	4.4%	1.5%	100.0%
	度数	4.9	1	2.7	1.1	-3	3.2	-7.2	9	-2.3	-2.9	-2.3	-1.0	9	1297
	CELLNAMEの 標準化残差	12.6%	2.5%	1.7%	12.9%	2.3%	24.6%	15.2%	9.5%	7.9%	1.3%	2.9%	5.4%	1.2%	100.0%

(注) 黄色表示は残差分析が有意であったことを示す

タイプ状況として分類した結果を表4-2に示す。ポジティブな状況では「家族」「友人」との関係性が多かったのに対し、ネガティブな状況では「自分一人」「一般大衆」「見知らぬ人」との関係性が多いことが明らかとなった(以上、学会報告2,3,4)。

表4-2:「関係性」に関する分類枠の検討結果

状況	relation	関係性														合計								
		自分一人	一般大衆	見知らぬ人	友人	家族	友人	家族	友人	家族	友人	家族	友人	家族	友人									
ポジティブ	度数	0	0	10	2	41	1	8	4	16	2	23	115	1	1	1	3	108	1	3	18	5	363	
	relationの 標準化残差	0.0%	0.0%	2.8%	6%	11.3%	3%	2.2%	1.1%	4.4%	6%	6.3%	31.7%	3%	3%	3%	8%	29.8%	3%	8%	5.0%	1.4%	100.0%	
	度数	-6	-5	2.6	-7	1.5	-2	1.3	1.5	3.4	-9	-3.1	-3.4	-1.0	1.2	2.1	4.3	-2	-6	2	2	2	2	363
	relationの 標準化残差	-1.0%	-1.0%	0.4%	-1.1%	0.2%	-0.3%	0.2%	0.2%	0.5%	-1.5%	-0.5%	-0.5%	-0.2%	0.2%	0.3%	0.6%	-0.3%	-1.0%	0.3%	0.3%	0.3%	0.3%	100.0%
ネガティブ	度数	1	2	4	6	60	5	8	2	7	9	129	388	7	6	0	0	115	3	10	12	1	769	
	relationの 標準化残差	100.0%	100.0%	28.8%	80.0%	59.4%	75.0%	50.0%	33.3%	30.4%	61.8%	84.9%	77.1%	87.5%	0.0%	0.0%	0.0%	51.6%	75.0%	76.9%	40.0%	16.7%	67.9%	
	度数	4	6	-1.8	5	-1.0	2	-9	-1.0	-2.2	6	2.5	2.5	7	-9	-8	-1.4	-3.0	2	4	-1.9	-1.5	-1.5	
	relationの 標準化残差	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	

(注) 黄色表示は残差分析が有意であったことを示す

さらに、「行為内容」の分類をめざし、Saucier(2007)を基盤に新たに作成した30カテゴリにより2人のコーダーが行為の分類を行った(一致率89.4%)。関係分類と同様に、ポジティブ・ネガティブに分類した結果を表4-3に示す。ポジティブな状況では、食事、スポーツ、趣味活動、旅行などの行為が行われる一方、ネガティブな状況では、事故、葛藤、健康行動(人間ドックなど)、法事、仕事などの行為が行われることが示された(以上、学会報告4,5)。

以上より、場面、関係性、行為に関し、ほぼ妥当な分類枠が得られた。このように、場面、関係性、行為の3側面から状況を捉えることにより、「状況」の特徴を理解することができると考えた。

表4-3:「行為」に関する分類枠の検討結果

状況	code	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
活動		スポーツ する・ト レーニン グする・ 試合に参 加・試合 を見る	勉強す る・試験 を受ける ・試験 を受ける	食べる・ 料理を 作る・食 料を管理 する	散歩・飲 み会に参 加する	会話す る・議論 する・人 と会う	TVを見る ・映画を 観る・電 視番組を 観る	ゲームを する	ネットを する・ SNSを する	本を読 む・読書 をする	仕事す る・働 く・アル バイト	買物す る・セッ トアップ する	化粧品 を使う・ 服を洗 う・髪を 洗う	デートす る・セッ トアップ する・親 戚と会う	旅行にい く・健康 診断に参 加する	寝る・働 く	趣味を楽 しむ・遊 ぶ・つる ・遊ぶ
ネガティブ	number	4	4	10	5	27	11	4	5	1	38	38	5	1	0	0	18
	behavior%	1.0%	1.0%	4.40%	0.80%	10.20%	3.00%	1.10%	1.40%	0.30%	10.50%	9.90%	1.40%	0.30%	1.70%	1.70%	6.00%
	residual	-4.00	-1.80	-5.00	-2.50	1.10	-2.80	-1.90	0.60	-0.60	2.80	1.10	1.90	-1.40	-2.60	1.60	-2.80
ポジティブ	number	51	22	111	25	63	52	23	6	4	45	61	5	8	37	5	74
	behavior %	6.60%	2.90%	14.40%	3.30%	8.20%	6.80%	3.00%	1.00%	0.80%	5.90%	7.90%	0.40%	1.00%	4.80%	0.70%	9.90%
	residual	4.00	1.80	5.00	2.50	-1.10	2.80	1.90	-0.60	0.60	-2.80	-1.10	-1.90	1.40	2.60	-1.60	2.80
	total	55	26	127	28	100	63	27	11	5	83	97	8	9	43	11	94
活動		ペットと 遊ぶ・ ペットを 飼う・ ペットを 見る	お金を儲 ける・お 金を稼ぐ ・お金の 管理	結婚式に 参加する ・お祝 いをする ・披露 宴	健康行動 ・運動す る・車	健康行動 ・運動す る・車	けんかす る・怒鳴 る・罵詈 雑言	子どもの 成長を 楽しむ・ 学校にあ い出・怪 獣	買い占め ・コロン ナリ	引越	その他	合計					
ネガティブ	number	2	4	0	8	15	25	5	22	3	27	21	15	1	7	7	363
	behavior%	0.60%	1.10%	0.00%	2.50%	4.10%	8.00%	1.40%	6.10%	0.80%	7.40%	5.80%	4.10%	0.30%	1.90%	1.90%	32.10%
	residual	-0.60	-2.50	-3.90	-1.10	-3.70	1.50	-6.10	-1.50	-5.60	-5.10	-3.90	-0.80	-2.30	-1.90	-1.90	-3.90
ポジティブ	number	7	1	45	2	44	23	4	7	16	9	2	6	5	4	769	
	behavior %	0.90%	0.10%	5.90%	0.30%	5.70%	3.00%	0.90%	0.90%	2.10%	1.20%	0.30%	0.80%	0.70%	0.50%	67.90%	
	residual	0.60	-2.50	2.50	-3.90	1.10	-3.70	-1.50	-6.10	1.50	5.60	5.10	3.90	0.80	2.30	1.90	3.90
	total	9	5	54	10	59	52	9	11	11	14	13	11	6	11	11	1132

(注) 黄色表示は残差分析が有意であったことを示す

さらに、状況のポジティブリティと個人的ウェル・ビーイング評定の相関は.352(男性=.432、女性=.281)となり、両者が関連している可能性が示された。同様に、状況のポジティブリティと5つの状況的ウェル・ビーイングの相関は.47~.70となり、より強い関連性が見られることが示された。こうした知見をもとに、目的3)個人の強み(特性)と状況解釈の関連の検討を行ったが、その前に、第1回調査で得られた、状況評定尺度の分析結果について報告する。

3) 状況評定尺度の分析

状況評定尺度のうち、DIAMONDS尺度の因子分析結果を行ったところ、オリジナルでは8因子が抽出されていたが、これが5因子(ネガティブティ、義務・知性、ポジティブティ、配偶・社会性)となり、ネガティブな意味をもつ因子(逆境、ネガティブティ、欺瞞)が1つにまとまった。これは、今回のデータに、ネガティブな状況に分類される暴力や葛藤状況が少なかったためと考えられ、DIAMONDS尺度はポジティブ心理学的研究でも適用可能と考えられた。

また、CAPTIONの因子分析結果は、オリジナル尺度と同一の7因子解(逆境、ポジティブティ、ユーモア、複雑性、典型性、重要性、ネガティブティ)を示した(表4-4)。状況認知の枠組みとして、DIAMONDSより優れた安定性をもつ可能性が示唆され、今後の研究で、主要な状況認知尺度として用いることにした。

Situation 5は、第1因子に心理負荷と認知負荷が、第2因子に活気、第3因子に刺激欠如、第4因子に結果期待がまとまった。SAAPは第1因子から順に、配偶維持、自己保全、親族配慮、親和、地位、疾病回避、配偶選択となった。これらの結果や、Horstmann, et al. (2018)のまとめから、CAPTIONとDIAMONDSは、本邦でも状況認知尺度として利用出来ると判断し、以下の分析で用いることにした(以上、学会報告1,2,3,4,5)。

4) 個人の強み(特性)と状況解釈の関連の様相

個人の強み(特性)と状況解釈の関連の様相を検討するために、第2回調査を行った。独立変数として、状況解釈(状況認知尺度)と強み尺度、Big Five尺度を位置づけ、従属変数として個人的ウェル・ビーイング、SWLS、状況的ウェル・ビーイング、心理的ウェル・ビーイングの各尺度得点を用い、階層的重回帰分析により、得点予測の妥当性を検討した。

強み尺度は、森本・高橋(2013)による強み尺度と、島井(2019)の強み尺度を融合させた48項目(24側面×2尺度)を利用した。これらはVIA-IS(Peterson & Seligman, 2004)の240項目を基盤にしており、より少ない項目で「強み」を測定出来るよう意図して作成されたものである。因子分析の結果、6因子が抽出され、第1因子が興味関心・勇気(独創性、好奇心、向学心、勇気)、第2因子が人間性・感謝(愛・親切・審美心・感謝・ユーモア)、第3因子が思慮・誠実性(判断力・見通し・誠実性・思慮深さ)、第4因子が公正寛容・制御(公正さ・寛大さ・コントロール)、第5因子がチームリーダー(チームワーク・リーダーシップ)、第6因子が精神性(熱意・精神性)と解釈された。この尺度の中

で、VIA-ISを構成する24の側面のうち、20の側面は、それぞれ2つの尺度により同一の側面としてまとめたが、勤勉さ、謙虚さ、樂觀性、社会的知能の4側面は2つの尺度がそれぞれ異なる因子に負荷を示し、分析から除外された。Big Five尺度15項目は、それぞれ3項目づつ5因子(神経症傾向、誠実性、協調性、開放性、外向性)にまとめた。

表4-4: 状況評定尺度(CAPTION)の因子分析結果

		因子						
		1	2	3	4	5	6	7
1.	学術的	-.108	-.014	.042	.918	-.060	-.157	.054
2.	疲弊する	.872	-.021	-.017	-.018	-.058	-.031	-.106
3.	大切な	.127	.788	-.196	-.066	.070	.084	.019
4.	通常の	-.025	.065	-.058	-.050	.872	-.046	.050
5.	有用な	.051	.046	-.074	.094	.048	.718	.083
6.	ばかばかしい	.244	-.104	.636	-.001	-.042	-.092	.047
7.	不快な	.549	-.051	.096	-.101	-.021	-.026	.287
8.	知的な	.018	.039	-.025	.724	.019	.082	-.084
9.	らんざりする	.794	-.063	.076	-.099	-.039	-.003	.068
10.	愛すべき	-.072	.924	.061	-.013	.016	-.111	.053
11.	一般的な	.019	-.001	-.014	-.019	.808	.003	.023
12.	効率的な	.065	.072	-.046	.276	.099	.435	-.010
13.	間が抜けた	.102	-.010	.611	.058	.095	-.062	.035
14.	卑劣な	.055	.052	.229	.035	.046	-.001	.700
15.	教育的な	.194	.336	-.091	.491	.134	-.154	-.075
16.	あざあざする	.578	-.049	.221	.015	.126	-.072	.094
17.	心温まる	-.137	.829	.040	-.000	.077	-.009	.032
18.	標準的な	-.005	-.087	-.002	.104	.698	.099	-.028
19.	有益な	-.038	.070	-.019	.166	-.033	.681	-.014
20.	ユーモラスな	-.173	.357	.441	.018	-.012	.157	-.168
21.	悪意のある	.140	.024	.230	-.038	.018	.038	.646
22.	科学的な	-.077	-.120	.043	.764	-.021	.014	-.142
23.	ストレスフルな	.709	-.004	.016	.022	.004	-.009	-.073
24.	特別な	.024	.692	-.025	.057	-.285	.190	.133
25.	普通の	-.089	-.052	.019	-.049	.898	-.077	-.012
26.	生産的な	.071	-.004	-.039	.362	.134	.318	.097
27.	おかしい	.024	.011	.720	.006	-.037	.012	-.023
28.	奇怪な	.052	.041	.324	.113	-.053	.028	.540
29.	技術的な	.043	-.072	.014	.638	-.062	.062	-.090
30.	骨の折れる	.814	.064	-.013	.089	-.031	.080	-.108
31.	愛情のこもった	.094	.984	-.054	-.009	.017	-.140	-.014
32.	平均的な	.059	-.029	.114	.063	.590	.143	.011
33.	活気のある	-.102	.429	.159	.024	.043	.208	-.142
34.	ふざけた	-.021	.068	.791	-.082	.001	-.035	.032
35.	気味の悪い	.103	.004	.172	-.009	.008	.060	.702

逆境 ポジティブ ユーモア 複雑性 典型性 重要性 裨(ヒ) 裨(ヒ) 裨(ヒ)

状況的ウェル・ビーイングは、第1回調査を参考に、5側面10項目の尺度を作成した。因子分析の結果、文化的、社会的、活動的、意味的、感情的ウェル・ビーイングという、仮説した5側面に分かれることが示された(表4-5)。心理的ウェル・ビーイング尺度は、岩野他(2015)から6側面について3項目づつを抽出し構成された。因子分析の結果、オリジナルな研究で指摘されている6因子(心理的成長、自己受容、人生目的、環境制御、自律、積極的人間関係)が、きれいに抽出された。

これらの変数の関連性について、都合6回の分析を行った(学会報告6,7,8,9,10,11)。結果のまとめを表4-6に示した。このうち第6回の分析を中心に結果を紹介する(表4-7:学会報告,11)。まず、個人的ウェル・ビーイング(幸福感)やSWLSの説明因としては強みの有効性が高いことが示された。階層的重回帰分析の結果は、幸福感やSWLS(一般的ウェル・ビーイング)の予測に、強み(特に精神性)が有効な予測因になることを示している(表4-7)。Big Fiveの説明率は低かったが、神経症傾向の低さが有効な予測因になることが示された。一方、状況認知変数では、ポジティブ性と重要性が有効な予測因になったが、Big FiveとともにR²の増分は低く(R²=.01~.03)、有意ではあるが有効な説明因とはみなされないことが示された。

一方、状況的ウェル・ビーイングの説明因としては状況認知因子の有効性が高いことが示された(表4-7)。状況的ウェル・ビーイングに関しては、状況認知因子(CAPTION)のポジティブ性(愛情のこもったなど)、ネガティブ性の低さ(悪意のあるなど)に加え、重要性因子(有用ななど)、複雑性因子(知的ななど)、典型性因子(通常的ななど)がウェル・ビーイングの予測に有用であることが示された。状況の性質を愛情に富み、悪意がないなどと認識することが、ウェル・ビーイングの高さに結びつくという結果であり、これまで状況要因に注目してこなかったウェル・ビーイング研究に新たな観点をもたらす知見として意義がある。状況的ウェル・ビーイングの中で、社会的ウェル・ビーイングに関しては強みやBig Fiveによる予測も有効となった。社会的ウェル・ビーイング(他者やコミュニティ・社会との絆を感じる)については、リーダーシップや興味・関心などの強みや外向性などのパーソナリティも有効な予測因となることも示された。ただ、Big Fiveによる予測性は、全般に強みや状況認知による予測性よりも弱いことが明らかにされた。

問題点として、状況的ウェル・ビーイングに関しては、表4-5に示されるように「その場面(状況)では」という限定詞をつけた質問について判断を求めており、そのことが結果に影響した可能性がある。一方で、社会・認知論の主張するように、限定的な状況下では、特性変数よりも状況変数の予測力が重要なものとなることも考えられ、今回の結果は、ポジティブ心理学にとって状況変数を考慮することの重要性を示しているものと考えられる。

表4-5: 状況的ウェル・ビーイング尺度の因子分析結果

		因子				
		1	2	3	4	5
1.	その場面(状況)では、感情的にポジティブになれる	0.356	0.092	0.142	-0.037	0.332
2.	その場面(状況)では、自分の生きる意味を確認できる	0.289	0.085	0.164	0.380	0.009
3.	その場面(状況)では、自分のやりたい活動がやれているという充実感を感じることができる	0.095	0.050	0.732	-0.091	0.048
4.	その場面(状況)では、他者とのつながりや絆を感じることができる	0.024	1.042	-0.079	-0.055	-0.001
5.	その場面(状況)では、心のおだやかさや平穏さを感じることができる	0.911	-0.069	-0.033	-0.045	0.046
6.	その場面(状況)では、自分の幸福感を感じることができる	0.033	-0.036	-0.029	0.027	0.998
7.	その場面(状況)では、自分の人生の目的について考えることができる	-0.036	0.008	-0.031	1.027	0.019
8.	その場面(状況)では、自分のやりたい活動について集中して考えることができる	-0.093	-0.045	0.880	0.045	-0.057
9.	その場面(状況)では、コミュニティや社会とのつながりや絆を感じることができる	-0.088	0.608	0.088	0.094	-0.033
10.	その場面(状況)では、おだやかな日常生活の重要性を感じることができる	0.836	-0.010	-0.045	0.031	-0.112

文化的のWB 社会的WB 活動的WB 意味的WB 感情的WB

表4-6: 強みと状況認知によるウェル・ビーイングの予測結果のまとめ

	独立変数	従属変数	結果
1	日心2021	強み,CAPTION	幸福感,SWLS
2	パン心2021	強み,CAPTION	領域的WB
3	ECPP2022	強み,DIAMONDS	領域的WB
4	社心2022	強み,CAPTION	心理的WB
5	日心2022	Big Five,CAPTION	領域的WB
6	パン心2022	強み,Big Five,CAPTION	領域的WB

強みによる予測の優位性
CAPTIONの予測の優位性
DIAMONDSの予測の優位性
強みによる予測の優位性
CAPTIONの予測の優位性
CAPTIONの予測の優位性

表 4 - 7 : 強み、Big Five、CAPTION による状況の・一般的 WB の予測結果

独立変数	従属変数					WBの側面		一般的WB		SWLS
	感情的WB	意味的WB	活動的WB	社会的WB	文化的WB	個人的WB	SWLS			
強み因子 (step1)	興味関心	-0.012	-0.031	-0.040	0.118	0.08	-0.073	-0.022		
	人間性感受	0.102	0.058	0.031	0.04	0.072	-0.012	-0.071		
	思慮誠実	0.061	0.001	0.105	-0.149	0.074	-0.075	0.034		
	公正寛容	0.014	-0.019	0.025	-0.073	0.009	0.17	0.134		
	チームリ	0.008	0.006	0.008	0.219	-0.075	0.061	0.08		
	精神性	-0.028	0.212	0.037	-0.014	0.032	0.281	0.33		
	R ² _{adj}	0.125	0.15	0.084	0.134	0.13	-0.079	0.255		
	F	22.930	28.129	15.045	24.815	22.8	27.731	53.649		
Big Five (Step2)	BFN	-0.011	0.045	-0.022	0.055	0.044	-0.09	-0.118		
	BFC	0.016	-0.063	-0.06	-0.085	-0.023	0.044	0.09		
	BFA	-0.002	-0.071	-0.01	0.059	0.05	0.061	0.017		
	BFO	0.024	0.053	0.075	-0.126	-0.027	0.059	0.069		
	BFE	-0.034	0.039	-0.041	0.205	-0.042	-0.052	-0.001		
	R ² _{adj}	0.151	0.181	0.115	0.194	0.145	0.125	0.276		
	R ²	0.03	0.025	0.036	0.064	0.025	0.014	0.025		
	F	6.55	5.995	7.5	14.529	5.375	2.988	6.338		
CAPTION (step3)	Cネガティ	-0.214	-0.102	-0.219	-0.042	-0.145	-0.079	0.106		
	Cポジティ	0.375	0.354	0.065	0.318	0.397	0.125	0.144		
	C典型性	-0.061	-0.066	-0.096	0.006	0.088	0.048	0.077		
	C複雑性	-0.021	0.098	0.215	0.079	-0.113	0.043	0.061		
	C重要性	0.146	0.093	0.245	0.005	0.051	-0.126	-0.139		
	C逆境	-0.186	0.054	-0.093	0.009	-0.114	-0.042	-0.087		
	Cユーモア	0.071	-0.054	0.034	-0.005	0.055	0.002	0.002		
	R ² _{adj}	0.428	0.300	0.261	0.279	0.357	0.174	0.303		
	R ²	0.278	0.133	0.149	0.09	0.214	0.023	0.031		
	F	64.007	25.039	26.606	16.441	43.85	3.662	8.233		

(注) 黄色部分は.0.1%水準で有意な関連、橙色部分は1%または5%水準で有意な関連があることを示す

5) 強みと状況のマッチングとウェル・ビーイングの関連

最後に、強みと状況のマッチングがウェル・ビーイングの増進につながるか検討を行うために、第3回の調査を行った。まず、状況・関係性・行為分類の結果や第2回調査の結果をもとに、ウェル・ビーイングに関連すると考えられる5つの状況（一人であるいは家族や友人とゆっくり食事をする、健康のために、一人であるいは仲間と運動をする、いつも行く店で一人あるいは家族と買い物をする、施設や入院している人に面会について話をする、会議や講義で、知り合いと学習したり論議したりする）を選定し、それぞれの状況について、1) その状況に該当する経験をどの程度したか（1：ほとんど経験しなかった～6：しばしば経験した）、2) その経験によって幸福感が上昇したか（1：かなり低下した～6：かなり上昇した）、3) 幸福感の上昇はどの程度続いたか（1：ほとんど続かなかった～6：数ヶ月続いた）という3つの質問に回答を求めた。表4-8には、幸福感の上昇と持続の相関を示した。

表 4 - 8 : 幸福感の上昇と幸福感の持続の関連

	幸福感が上昇はどの程度続いたか				
	状況 1	状況 2	状況 3	状況 4	状況 5
その経験によって幸福感が上昇したか					
1 一人で、あるいは家族や友人とゆっくり食事をする	.337**	.238**	.236**	.095**	.111**
2 健康のために、一人であるいは仲間と運動をする	.144**	.408**	.153**	.147**	.149**
3 いつも行く店で、一人あるいは家族と買い物をする	.216**	.196**	.309**	.102**	.110**
4 施設や入院している人に、面会について話をする	-.052	-.091**	-.031	.334**	.231**
5 会議や講義で、知り合いと学習したり論議したりする	.017	.145**	.021	.279**	.383**

いずれの結果についても、対角要素の相関が高く、1ヶ所を除いてすべて.30以上の関連がみられている。すなわち、特定の状況を経験するほど、幸福感が上昇し、持続するという関連性が示されている。ここから、状況経験が豊かになるほど、ウェル・ビーイングが向上する可能性が示唆された。

次に、強みと状況のマッチングを検討するために、まず強み尺度と状況認知尺度について因子分析を行った。状況認知については、5つの状況のうちの1つを強制的に割り当て、回答を求めた（状況1：n=206、状況2：n=188、状況3：n=215、状況4：n=215、状況5：n=206）。強み尺度は、第2調査の第5因子と第6因子が統合され、4因子構造（興味関心・勇気・精神性、思慮・誠実性、人間性・愛、公正さ）となった。CAPTIONは前調査と同様の7因子（ネガティブティ、ユーモア、ポジティブティ、複雑性、典型性、重要性、逆境）が得られた。これらの変数を独立変数とし、経験の程度、幸福感の上昇、幸福感の持続を従属変数とする階層的重回帰分析を行った。結果を表4-12、4-13、4-14に示す。

これらの結果から、経験の程度、幸福感の上昇、幸福感の持続のいずれについても、強みより状況認知のほうが一貫して高い予測力を示すことが明らかになった。ただ、強みも関連を示す状況がみられ、たとえば、面会状況への参加は興味・関心・勇気などの強みをもつほうがより頻繁に行うであろうこと、同時に状況よりポジティブでユーモアをもって認知するほど頻繁な経験につながるであろうことが示唆された。また、幸福感の上昇については、強みと状況認知の双方が関連し、たとえば、健康増進場面での幸福感は、思慮・誠実性の強みを持ち、興味・関心・勇気などが低いほど、またそうした場面を重要で、ネガティブではないとみなしているほど高まることを示唆された。同様に、幸福感の持続についても、両者の関連がみられ、たとえば会議・講義場面での幸福感の持続には、興味・関心・勇気の高さと人間性・愛の低さが関連するとともに、ポジティブで複雑、重要性は低いとみなすことが関連することが示唆された。

結論として幸福感の上昇や持続には、強み要因と状況要因の双方が関与しており、両者の関連性が重要であること、ただし、関連の様相は、状況によって様々に変化することが示された。

6) 本研究の成果のまとめ

本研究で得られた成果は以下のとおりである。

- 1) 心理的状況研究のまとめ：欧米では盛んに行われている「心理的状況」研究について、本邦で初めての論考をまとめ、特に人間・状況論争のその後の展開や、状況認知尺度研究の発展について紹介した。
- 2) 心理的状況の分類枠の検討：心理的状況の分類枠として、場面、関係性、行為の3つの視点からの分類枠を作成し、関連研究で利用出来るものとした
- 3) 状況評価尺度の整備：欧米で開発された状況評価尺度を翻訳・検討し、利用に供した。とりわけCAPTION(Parrigon, et al., 2017; 35項目)と呼ばれる尺度が、因子的妥当性からみても有用であることを示した
- 4) 個人の強み（特性）とそうした状況認知の関連の様相の検討：強み尺度を整備し、状況評価尺度とともにウェル・ビーイングの予測性を検討した結果、幸福感やSWLSなど、一般的なウェル・ビーイングの予測には強みが有効だが、状況的ウェル・ビーイングの予測には状況評価尺度が有効であることを示した
- 5) 強みと状況認知のマッチングの検討

幸福感の上昇や持続には、強みと状況認知の双方が関連し、その様相は状況ごとに異なることを示した

6) 本研究の反省点：COVID-19の影響下での研究で、こうした社会的要因がどのような影響を与えたか明確に捉え切れていない。また、強みと状況のマッチングに関しては、介入研究により検討すべき課題であったが実践できなかった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計12件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Kazuya HORIKE & Hiroko HORIKE
2. 発表標題 Predictability of strengths and situation toward local and global SWBs
3. 学会等名 10th European Congress on Positive Psychology, (2022, Reykjavik, June, 30) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 堀毛一也・堀毛裕子
2. 発表標題 ポジティブな「状況」に関する研究(6) - 強みと状況認知による心理的ウェル・ビーイングの予測 -
3. 学会等名 日本社会心理学会第63回大会(2022、京都、9月14日)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 堀毛一也・堀毛裕子
2. 発表標題 ポジティブな「状況」に関する研究(7) - 状況認知とBig Fiveによるウェル・ビーイングの予測 -
3. 学会等名 日本心理学会第66回大会(2022、東京、9月9日)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 堀毛一也・堀毛裕子
2. 発表標題 ポジティブな「状況」に関する研究(8) - 強み・Big Fiveと状況認知によるウェル・ビーイングの予測 -
3. 学会等名 日本パーソナリティ心理学会第31回大会(2022、那覇、12月3日)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kazuya HORIKE & Hiroko HORIKE
2. 発表標題 A study on the 'positive situation'.
3. 学会等名 World Congress on Positive Psychology 2021(online: July,15-17) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kazuya HORIKE & Hiroko HORIKE
2. 発表標題 Some characteristics of 'positive situation'.
3. 学会等名 Conference on Asian Association of Social Psychology 2021 (online, July,29-31.) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 堀毛一也・堀毛裕子
2. 発表標題 ポジティブな「状況」に関する研究(3) - ポジティブな「状況」で行われる行動に関する検討 -
3. 学会等名 日本社会心理学会第62回大会(オンライン、8月26-27)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 堀毛一也
2. 発表標題 ポジティブな「状況」に関する研究(4) - 状況認知と「強み」によるウェル・ビーイングの予測 -
3. 学会等名 日本心理学会第85回大会(オンライン、9月1-8)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 堀毛一也
2. 発表標題 ポジティブな「状況」に関する研究(5) - 「強み」と状況認知によるウェル・ビーイングの諸側面の予測 -
3. 学会等名 日本パーソナリティ心理学会第30回大会(オンライン、9月25-26)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 堀毛一也・堀毛裕子・山崎有望
2. 発表標題 ポジティブな状況に関する研究(1)
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 堀毛一也・堀毛裕子
2. 発表標題 ポジティブな状況に関する研究(2)
3. 学会等名 日本社会心理学会第61回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 堀毛一也
2. 発表標題 ポジティブ心理学：応用研究の最前線(指定討論)
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 堀毛一也	4. 発行年 2020年
2. 出版社 誠信書房	5. 総ページ数 180
3. 書名 心理学から見た社会（安藤清志・大島尚（監修）、第3章分担執筆）	

1. 著者名 堀毛一也	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 241
3. 書名 社会的認知（唐沢かおり（編）、第9章分担執筆）	

1. 著者名 堀毛一也	4. 発行年 2019年
2. 出版社 サイエンス社	5. 総ページ数 367
3. 書名 ポジティブなこころの科学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------